

genius
今月のGな人

ジェムスターマルチメディア株式会社
代表取締役社長
西村 明高さん

電子番組表を世界に普及させたジェムスター社は、日本におけるパートナーとして、なぜ電通を選んだのか。

世界に先駆け、アメリカで「Electronic Program Guide (電子番組表)」を開発したジェムスター社は、電子番組表に関する重要な特許、技術を広範囲に所有している。アメリカ全土はもちろん、それこそ世界中に「輸出」され、先進各国において「電子番組表」がスタンダードサービスとして普及。1999年4月、そのジェムスター社が、日本の広告会社「電通」と組んで作った会社が、株式会社インタラクティブ・プログラム・ガイド (IPG)。ジェムスター社が広告会社とパートナーシップをとって法人を設立するケースは、世界でもあまり例はないという。なぜ、そのような選択肢をとったのか。「電子番組表」は、どのように進化、発展していくのか。ジェムスターマルチメディア株式会社代表取締役社長、西村明高さんにうかがってみました。

「ジェムスター」ってどんな会社か、簡単にご紹介いただけますか。

正式名は、Gemstar-TV Guide International, Inc. と申しまして、1986年に設立されたアメリカの会社です。本社はハリウッドにあります。

創業者はヘンリー・ユーエンで、彼が、テレビ番組情報を最大8桁数字にエンコードする技術を開発しました。それが、みなさんも知っている「VCR Plus+ (日本ではGコード)」というサービスです。この「Gコード」に加えて、より<メタな>データを提供できるシステムとして開発されたのが、「TV Guide On Screen」という電子番組表サービスで日本では「Gガイド」としてサービスしているものです。このサービスは、アメリカ全土に普及し、今では、地上波テレビ、ケーブルテレビ、AV機器、オンライン、モバイルといった様々なプラットフォームに提供されています。テレビを見ようとすると、必ずGガイドに触れる・・・アメリカ全土でのカバー率は、100%以上、つまりその地域で地上波だけではなく、複数のケーブルテレビでサービスされています。また重要なのはこれらサービスに必要な特許の殆どを押さえており、安心してサービスをご利用頂けるという事です。



お話をうかがうと、「Gガイド」って、テレビというメディアにおける「マイクロソフト」のような存在に見えますが・・・

確かに、そのようにおっしゃる方もいます(笑)。創業者のヘンリー・ユーエンは、まさしく「天才」でして、考え出したビジネスモデルで会社が発展しているという点では、通じるものがあるかもしれませんね。ただ、コンピューターアプリと大きく違うのは、Gガイドは、テレビ番組というその国々においてそれぞれ独特の<文脈>をもって世の中に送り出されるコンテンツと絡んだサービスである点。ここが、Gガイドの普及にあたって、とても重要なポイントになります。

ジェムスターが、日本におけるパートナーとして「電

通」を選んだ理由も、その点に関係するのでしょうか？

そうです。テレビ番組に関して、日本がたいへん特殊なのは、「EPGコンテンツ情報の全ての権利が放送局に帰属している」点です。欧米の場合、コンテンツ情報のパイアウトが可能ですから、買い上げた情報は二次利用が可能。従って、オビニオンリーダーや視聴者による番組レコメンド等も自在に露出することもできます。しかし、日本は、今のところ、そういうわけにはいきません。放送局の理解、協力なしには、電子番組表サービスは成立しません。しかも、「全」放送局との。それができる企業は、日本では「電通」しかありません。

放送局との強いリレーションが「電通」を選んだ理由、ということですか？

いいえ、それだけではありません。もうひとつ、電通に大きく依存する理由は、「広告」です。日本で電子番組表サービスを展開する際に、「広告」はたいへん重要な要素。無料放送である地上波放送がメインの日本では、アメリカと違って、「テレビ=〈ただで面白いものが見られる〉」という風土が定着しています。電子番組表も、基本的にお客様には無料で提供されるべきものですから、そのためには広告というビジネスを組み入れることが大変重要になってきます。いま日本のGガイド、Gガイドモバイルともにすべて無料で提供され、広告が組み込まれていますが、電子番組表と広告を組み合わせたビジネスモデルは、世界各国のなかでも日本が最もうまくいっています。

それと、もうひとつ、ジェムスターが電通に期待していることが「新しいビジネスの創出」です。日本特有のカルチャー、インフラの中で新しいビジネスを展開していくには、人材、情報、ネットワーク力において日本のトップにいる電通とのパートナーシップは不可欠であると考えています。たとえば、今アメリカでも普及している「Gガイドモバイル」は、携帯電話が発達する日本特有のインフラ環境から生まれた「日本発」のサービスです。

Gガイド、Gガイドモバイルは、これから、どのように進化していくのでしょうか。

先にも申し上げましたように、番組情報のライセンス等の話と関わってくることで、一概に「技術的な進化が

サービスの進化に直結」することにはなりません。ただ個人的に思っていることは、『私って、どんな番組を見たいの?』という生活者に対して最適なコンテンツをレコメンドできることが、プログラムガイドが目指すべきサービスのカタチなのではないでしょうか。

ありがとうございました。知らなかった話をたくさん聞くことができました。今後もパートナーとしてよろしく願いいたします。

こちらこそ。

今月のGワード groovy word

PCT国際出願

ある発明に対して「特許権」を付与するか否かの判断は、各国がそれぞれの特許法に基づいて行います。したがって、特定の国で特許を取得するためには、その国に対して直接、特許出願をしなければなりません。しかし、近年は、経済と技術の国際化を背景に、複数の国で製品を販売したい、模倣品から自社製品を保護したいなどの理由から特許を取りたい国の数が増加する傾向にあります。同時に、そのすべての国に対して個々に特許出願を行うことはとても煩雑になってきました。先願主義では、発明したら一日も早く出願することが重要ですが、すべての国に対して同日に、それぞれ異なった言語を用いて異なった出願願書を提出することは、ほぼ不可能です。

このような煩雑さ、非効率さを改善するために設けられた国際的な特許出願制度が「PCT国際出願」。PCT国際出願では、国際的に統一された出願願書 (PCT/RO101) をPCT加盟国である自国の特許庁に対して特許庁が定めた言語で作成した1通を提出すれば、自己の指定した有効なすべてのPCT加盟国に対して「国内出願」を出願した扱いを得ることが可能。たとえば、日本の場合、日本特許庁に対して日本語または英語で作成した国際出願願書を1通提出すれば、それによって与えられた国際出願日が、指定したPCT加盟国における国内出願日となります。

Data Watching



アメリカにおける視聴番組決定プロセス

今月は、表面記事にて紹介のあった米国ジェムスター社 (Gemstar-TV Guide International, Inc.) の協力により、アメリカにおける視聴番組の決め方に関するデータを紹介いたします。

ケーブルテレビが発達しているアメリカは、日本よりも圧倒的に多チャンネルであり、また、VOD、オンライン動画配信も発達し、コンテンツが多様に存在します。そのため、それらを統合的にガイダンスするツールの必要性が日本よりはるかに高い、という事情があります。データによれば、DVRは、1200万世帯に普及。5500万世帯が単一画面 EPG

にアクセスし、2700万人がオンライン・ガイダンス・ウェブ・サイトにアクセスしています。

グラフ1を見て判るように、アメリカでは、過半数の視聴者が、「視聴時」に視聴番組を決定します。これは、ラテ面を見て、「今日のテレビ何があるかな」と、まず新聞のラテ面を見る日本とは様相が異なります。その背景には、日本の場合、一部のメディアでしか番組情報を掲載することができないのに対して、アメリカは番組のレコメンデーションがオープンであることがあります。

また、グラフ2でも判るように、たとえ事前に視聴番組を決定していたとしても「当日」である点も、多チャンネルであるアメリカ特有の現象といえるかもしれません。「何曜日の何時は決まってこれを見る」みたいな視聴番組の決め方や、「前日に見たテレビ番組をネタにみんなで盛り上がる」みたいな文化は、キー局を軸に全国一律に番組が配信される日本特有のカルチャーなのかもしれません。

いちばん思い出に残っている テレビ番組

Vol.9

「ルパン三世シリーズ」

1970年代前半にオンエアされ、視聴率が上がらず2クールのみで終了してしまった最初のルパン三世シリーズ。奇抜なストーリー展開、無国籍で不思議な感覚の場面設定、演出がその後の新シリーズや映画にはない独特



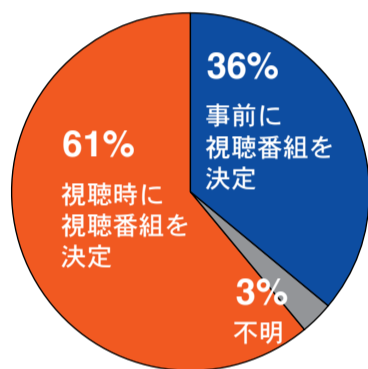
のもので、強烈な印象が残っています。ルパン三世の細い足首やいつもくしゃくしゃなタバコが、峰不二子の強烈なキャラとともに、小学生の無垢な心にとっては衝撃的でしたね。

子どもの頃の私にとって、テレビの影響力は、とても大きいものでした。その最たる出来事のひとつが、中学生の時に見たモントリオールオリンピックの体操で、日本男子が団体5連覇し、コマネチが史上初の10点を連発。これに触発された自分は、高校で体操部に入部してしまいました。それまで体操なんてやってことなかったの、かなり「衝動入部」でした。結果は?・・・やはり開始時期が遅すぎて大会にもほとんど出れずで、不完全燃焼に終わってしまいました(笑)。

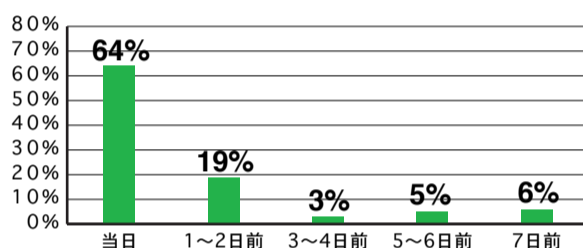
株式会社電通
第12営業局 営業部長 澤 秀明

【アメリカにおける視聴番組の決め方】

グラフ1 いつ視聴番組を決めているか



グラフ2 どのくらい事前に決めているか



協力：米国ジェムスター社 (Gemstar-TV Guide International, Inc.)

読書タイム

夢十夜

[第九夜]

夏目漱石

世の中が何となくざわつき始めた。今にも戦争が起りそうに見える。焼け出された裸馬が、夜昼となく、屋敷の周囲を暴れ廻ると、それを夜昼となく足軽共が轟きながら追かけているような心持がする。それでいて家のうちは森として静かである。

家には若い母と三つになる子供がいる。父はどこかへ行った。父がどこかへ行ったのは、月の出ていない夜中であった。床の上で草鞋を穿いて、黒い頭巾を被って、勝手口から出て行った。その時母の持っていた雪洞の灯が暗い闇に細長く射して、生垣《いけがき》の手前にある古い檜を照らした。

父はそれきり帰って来なかった。母は毎日三つになる子供に「御父様は」と聞いている。子供は何とも云わなかった。しばらくしてから「あっち」と答えるようになった。母が「いつ御帰り」と聞いてもやはり「あっち」と答えて笑っていた。その時は母も笑った。そうして「今に御帰り」と云う言葉を何遍となく繰返して教えた。けれども子供は「今に」だけを覚えたのみである。時々「御父様はどこ」と聞かれて「今に」と答える事もあった。

夜になって、四隣が静まると、母は帯を締め直して、鮫鞘の短刀を帯の間へ差して、子供を細帯で背中へ背負って、そっと潜りから出て行く。母はいつでも草履を穿いていた。子供はこの草履の音を聞きながら母の背中で寝てしまう事もあった。

土塀の続いている屋敷町を西へ下って、だらだら坂を降り尽くすと、大きな銀杏がある。この銀杏を目標に右に切れると、一丁ばかり奥に石の鳥居がある。片側は田圃で、片側は熊笹ばかりの中を鳥居まで来て、それを潜り抜けると、暗い杉の木立になる。それから二十間ばかり敷石伝いに突き当たると、古い拝殿の階段の下に出る。鼠色に洗い出された賽銭箱の上に、大きな鈴の紐がぶら下って昼間見ると、その鈴の傍に八幡宮と云う額が懸っている。八の字が、鳩が二羽向いあったような書体でできているのが面白い。そのほかにもいろいろの額がある。たいていは家中のものの射抜いた金的を、射抜いたもの名前に添えたのが多い。たまには太刀を納めたものもある。

鳥居を潜ると杉の梢でいつでも梟が鳴いている。そうして、冷飯草履の音がびちゃびちゃする。それが拝殿の前でやむと、母はまず鈴を鳴らしておいて、すぐにしゃがんで拍手を打つ。たいていはこの時梟が急に鳴かなくなる。それから母は一心不乱に夫の無事を祈る。母の考えでは、夫が侍であるから、弓矢の神の八幡へ、こうやって是非ない願をかけたら、よもや聴かれぬ道理はなからうと一図に思いつめている。

子供はよくこの鈴の音で眼を覚まして、四辺を見ると真暗だものだから、急に背中で泣き出す事がある。その時母は口の内で何か祈りながら、背を振ってあやそうとする。すると旨く泣きやむ事もある。またますます烈しく泣き立てる事もある。いずれにしても母は容易に立たない。

一通り夫の身の上を祈ってしまうと、今度は細帯を解いて、背中の子を摺りおろすように、背中から前へ廻して、両手に抱きながら拝殿を上って行って、「好い子だから、少しの間、待っておいでよ」ときつと自分の頬を子供の頬へ擦りつける。そうして細帯を長くして、子供を縛っておいて、その片端を拝殿の欄干に括りつける。それから段々を下りて来て二十間の敷石を往ったり来たり御百度を踏む。

拝殿に括りつけられた子は、暗闇の中で、細帯の丈のゆるす限り、広縁の上を這い廻っている。そう云う時は母にとって、はなはだ楽な夜である。けれども縛った子にひいひい泣かれると、母は気が気でない。御百度の足が非常に早くなる。大変息が切れる。仕方ない時は、途中で拝殿へ上って来て、いろいろすかしておいて、また御百度を踏み直す事もある。

こう云う風に、幾晩となく母が気を揉んで、夜の日も寝ずに心配していた父は、とくの昔に浪士のために殺されていたのである。

こんな悲い話を、夢の中で母から聞いた。

※最終回「第十夜」

運用管理ユニット 田辺 計市呂

I am IPG

こんにちは！田辺計市呂（「けいいちろう」と読みます）と申します。前職でのシステム・エンジニアを経て、今年4月にIPGのメンバーに加わりました。IPGへの転職のキーワードは「未知の領域でのチャレンジ」そして「大きな可能性」でした。実際に業務に携わり、GガイドやSIの理解が深まるにつれて、自分のいる場所の可能性を実感し、身震いしたものです。また、全国の放送局を巡る中で、多くの新しい刺激をいただき、IPG加入のキーワードが正しかったことを嬉しく思います。「可能性の巣」であるIPGの一員として一生懸命頑張ります！

